

向かう方向について考える美術

—シンガポール・ビエンナーレ2019

キム へシン
金 惠信

ビエンナーレbiennaleは、現代美術の分野で欠かせないことばとしてすっかり定着している。現代美術にさほど馴染みのない人でも、ビエンナーレの元祖であるヴェネツィア・ビエンナーレのことは耳にしたことがあるだろう。2年毎に開かれる国際美術展であるビエンナーレは、19世紀後半ロンドン、パリ、ウィーンなどで開かれた万国博覧会から始まり成長してきた。産業生産品から美術品まで陳列する場で、そこには帝国主義時代の国家間の競争が欠かせない。このことは1895年から始まったヴェネツィア・ビエンナーレにも引き継がれ、参加国は自国名がついたパビリオンを持っており、二年に一回そこを展示場として、その年に選ばれた国を代表するアーティストがいわば個展を開く。これとは異なる視点、つまり国の宣伝めいた展示へのアンチテーゼの性格でつくられた国際展示が、1955年ドイツのカッセルで発足したカッセルドクメンタdocumentaである。

世界には数えきれないほどの国際美術展がある。その多くはヴェネツィア・ビエンナーレのような国別展示空間を主展示に据えるかたちではなく、どちらかという設立当時のカッセルドクメンタが目指したように、世界と人類にある種のユートピア的ヴィジョンを提示できる現代美術の見せ場になっていると思われる。

今回で第6回目を迎えるシンガポール・ビエンナーレ2019は、フィリピン大学で教える美術史研究者パトリック・D・フローレスPatrick D. Floresがアーティストティックディレクターを務めた。フィリピンにおけるコロニアル絵画、東南アジアの近現代美術が専門で、2015年にはヴェネツィア・ビエンナーレのフィリピン館のキュレーションを手がけたキュレーターでもある。今回のシンガポール・ビエンナーレの会期は2019年11月22日から2020年3月22日までで、36の国と地域から、77組のアーティストによる150組以上の作品が参加した。シンガポール市内の11か所の会場は次にとおり。シンガポール美術館、ナショナル・ギャラリー・シンガポール、かつでの兵営を活用したアートハブであるギルマン・バラックス、ラサール・カレッジ・オブ・アーツ、アジア文明博物館、シンガポール国立博物館、南メソジスト大学・デ・スアンティオ・ギャラリー、シンガポール国立図書館、エスプラネード・シアターズ・オン・ザ・ベイ、ファー・イースト・プラザ、WILD RICE @ Funan。これらの会場名からわかるように、多くのビエンナーレと同じく、

多様な形態の現代美術作品を提示するため、開催地の美術館だけでなく、図書館、オールタナティブ展示空間、大学、複合文化施設をフルに活用している。

今回のシンガポールビエンナーレのテーマは、「Every Step in the Right Direction (正しい方向への一步一步)」。追いつけないほど激変する世界のこの時代に、向かうべき方向性への姿勢を問うフレーズだった。

二日半という短い日程で駆け足で回ったきでちょうどひと月が過ぎた。企画全体について考えをまとめることはまだ出来ていない。コロナウィルスとともに拡散する激震のような変化が世界の日常を覆い、今のところ終息の見えない中、進むべき方向について考えないといけない事柄は、トイレトペーパーやマスクから国境封鎖に至るまで増えるばかりだ。そうひう日々の中でビエンナーレのことを思い出すとき、目と脳裏に浮かぶ作品が何点がある。

今回のシンガポール行きは、研究者仲間が代表の科研の調査に分担者として加わって実現した。(基盤研究C「東アジアの女性アーティストに見る地域と歴史の境界をめぐる研究」研究代表者：小勝禮子) その研究との関連性の視点から女性アーティストの作品の中から記憶に残る数点を改めて思いだしてみる。

シャロン・チンSharon Chinの「In the Skin of a Tiger: Monument to What We Want(Tugu Kita)」(2019)[図1]は、ナショナル・ギャラリー・シンガポールの吹き抜け空間に13枚のバーナーを唾したインスタレーション作品。シャロン・チンは、自分の母国マレーシアの政党の旗の生地を持ってきて、シンガポールの人々を呼んで巨大なバーナーを縫うプロジェクトを行った。スローガンや主張などは書かれていないが、普通の人々の労力から生まれた色とりどりの巨大な布についた‘虎の皮膚’というタイトルは、強靱に織り込まれた民衆の声を指しているのではないだろうか。

シンガポールのアマダ・ヘン Amanda Hengは、1999年に行なったパフォーマンス「Let's Walk」シリーズを再考察した「Every Step Counts,2019」を出品している。一般の人々と「示された経路を他者とともに歩く行為」(作品解説パネル文より)を行うワークショップをとおして、生きていることの証である歩く行為を、一步一步のステップを繰り返す動作をもって考えつづけた作品だった。日本でも名前が広く知られるアマダ・ヘンは、社会に対する問題意識を持つ様々な作品を発表してきたシンガポール現代美術のパイオニアで、2019年にはシンガポール・ビエンナーレの主催者であるシンガポール・アート・ミュージアムとベネッセが開催する「第12回ベネッセ賞」を受賞している。

もっとも多い作品が展示されているナショナル・ギャラリー・シンガポールで常設展とビエンナーレ作品を回りながら何度も前を通った作品がある。通路の壁

に描かれたイエメンの若い作家、ハイファ・スベヤHaifa Subayの「War and Humans」(2019)。スベヤは戦禍に苦しむ祖国イエメンをテーマにした九つの連作を壁に描いた。彼女は自分の絵が、“平和のメッセージを伝え、争いを止め、戦争がもたらした苦痛を和らげることができることを願っている”と言っている。彼女の絵は、飢饉、地雷、移住、児童、軍人、ドメスティック・バイオレンスをテーマに、できるだけ多くの人の目の触れるよう、首都サアナの街の中でもっとも住民が多いエリアの壁を選んで描かれるという。

ビエンナーレが掲げたテーマ、「正しい方向への一歩」というのは、アーティストが各々の内面へ向けての思索（内省）を作品というかたちで外側に示すしぐさであり、それは別にこっちが正しい方向ですよ、と教諭するものではないことが大事だと思う。そういう意味で作品は内と外へ向かう方向が拮抗する場で、だから目や心が惹かれるのだ。

訪れたい美術館リストの最上位だったナショナル・ギャラリー・シンガポールをビエンナーレとあわせて見られたのがうれしかった。全館を隈なく見るには何日も必要だろう。旧市庁舎と旧最高裁判所の建物をつなげたナショナル・ギャラリーの空間についても考えながら思う存分見るために余裕のある日程で再訪したい。そのために、これを書いている今現在、地球上に拡散するコロナウイルス感染が終息へ向かうことを願う。

シンガポールへ向かう時はウィルスの勢いはまだアジア圏に限られていた。現地ではチェックインするホテルフロントではまずデジタル体温計で熱の有無を測った。美術館はもちろん入るすべての展示空間、ショッピングモールなどの建物の入り口には体温測定装置と消毒用ジェルが置かれていた。隣国と世界、他者とのこういうつながりへの認識が求められる状況が、まさに日常の一部になることは間違いない。今回の調査旅はそういう「日常」だった。

参考文献とサイト

- ・ Emma Barker (edited by), *Contemporary Cultures of Display*, New Haven Yale University Press 1999
- ・ ‘5 must-see artworks at the Singapore Biennale 2019’ By Mae Chan, 31 January 2020’, <https://www.optionstheedge.com/topic/culture/5-must-see-artworks-singapore-biennale-2019>
- ・ ‘Yemeni Artist’s Murals Depict Costs of War’ By Nisan Ahmado, April 17, 2019’, <https://www.voanews.com/extremism-watch/yemeni-artists-murals-depict-costs-war>



図1 展示風景、シャロン・チン、In the Skin of a Tiger:
Monument to What We Want (Tugu Kita)



図2 展示風景、アマンダ・ヘン、Every Step Counts,2019



図3 展示風景、アマンダ・ヘン、Every Step Counts,2019

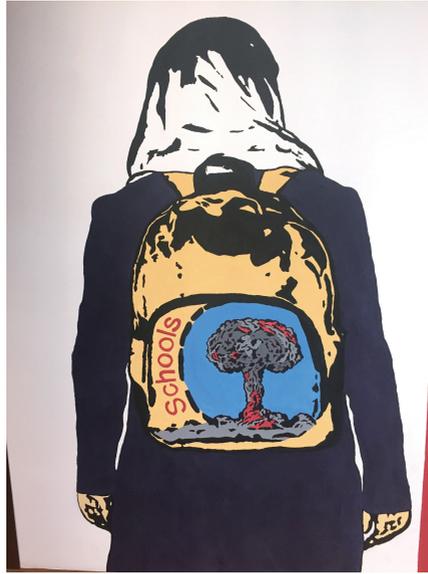


図4 展示風景、ハイファ・スベヤー、
War and Humans



図5 シンガポール・ナショナル・ギャラリー